

ルイ・マクニース

1 ラレドの街

ある朝早く 俺はアガグ王のように歩き回った
ある朝早く 火の海を通り抜け
舗道にむき出しになった邪魔ものを避けながら進むと
踏みつけたガラスがジャリジャリ もつれたワイヤーがジャラジャラ

顔中^{すす}煤まみれで歩いていると 老練の消防士に出くわした 5
そいつは俺を睨んでこう言った
「ラレドの街は どこも通れんぞ
今日中に^{こいつ}大火を抑えることなどできんからな

「ホースの先をしっかりと構えろ 斧は巧く使えよ
銀行は火の粉にまみれ 銀行員は業火の中じゃ 10
ラレドの街じゃ どこも略奪し放題
署に戻るにも サイレンを鳴らさにやならん」

近くの戸口から^{コックニー}下町おやじがにじり出てきた
頭の上には持ち出したロッキングチェアが揺れていた
「五十五年間 俺はこの愛の巣を守り続けてきたというのに 15
見てみる なんてこった いっそ死んだ方がましだ」

その声でアスファルトの裂け目から登場したのは
くすぶる大きな鬘^{かつら}をつけたサー・クリストファー・レン
「ラレドの街をめっちゃめっちゃに破壊させてやれ
地代の期限が切れたら俺様がまた建て直してやるさ」 20

怒りで鼻息を荒くしたバニヤンとブレイクが
鼻声で^{バイブル}書物の話をしながらバンヒル墓地からご登場
「黄金の街ラレドが倒れたぞ 倒れたぞ
燃えろ燃えろ永遠に 癒えることなき喉の渴き」

「避難所を求めてラレドへやってきたのに」と 25
彷徨^{さまよ}えるユダヤ人 トムやらディックやらハリーやら
「まずは警察署に行って申し込みと言うけれど
そこはペしゃんこ 一体どうしろってんだ」

こうして他人の愚痴^{ひと}を耳にしながら俺はラレドを歩き回った
不幸が引き出す格言どもの真実味に面食らって 30
ついに最後の低いささやきが俺の耳穴をふさいだ
天使のささやき 炎のささやき

夜更けに あたしはラレドの街へ行ってみたわ
深紅の真新しいドレスに身を包んだ気まぐれな花嫁
結局待っている人たちを不憫に思うことになったの 35
この花嫁姿を見ようと あたしの抱擁を待ってる人たちを

さあ喜びの鐘を鳴らして 日ごと放水車で遊びましょう
足には添木を着けてあげる 口には猿ぐつわを
ああ あなた ラレドの街 ラレドの街よ
赤い絨毯を敷いてちょうだい 死が私の結婚持参金よ 40

(三木菜緒美訳)